

令和7年度 第2回秋田県埋蔵文化財センター運営協議会
【概要・要旨】

令和7年度 秋田県埋蔵文化財センター運営協議会概要

名 称	秋田県埋蔵文化財センター運営協議会
設置根拠	秋田県埋蔵文化財センター運営協議会規定
設置目的	秋田埋蔵文化財センターの適正な運営と円滑な事業の推進を図るため
委員構成	委員長1名 副委員長1名 委員7名 計9名（うち女性委員2名） ※ 定数10名以内
委員任期	2年間：令和7年4月1日から令和9年3月31日まで
第2回	令和8年2月9日 14:00～15:10 埋蔵文化財センター第1研修室

令和7年度 第2回秋田県埋蔵文化財センター運営協議会 要旨

1 日 時：令和8年2月9日(月) 14:00～15:10

2 場 所：秋田県埋蔵文化財センター 第1研修室

3 出席者

委員：8名

高橋 忠彦	委員長	(秋田県文化財保護協会事務局長)
吉川 寿朗	副委員長	(仙北市立桧木内小学校校長)
安杖千佳子	委員	(仙北地域振興局総務企画部地域企画課課長)
伊藤 竜喜	委員	(柵の案内人 大仙市ほたるの会会員・史談会会員)
上田 満	委員	(横手市立大森小学校校長)
星野 友実	委員	(大仙市立高梨小学校校長)
武藤 浩紀	委員	(美郷町立千畑小学校校長)
和田 英範	委員	(南教育事務所仙北出張所所長)

事務局：6名

袴田 道郎	副所長	
佐々木敬隆	副主幹(兼)総務チームリーダー	(兼 払田柵跡調査事務所副主幹)
新海 和広	副主幹(兼)調査チームリーダー	(兼)払田柵跡調査事務所調査チームリーダー
村上 義直	主任文化財専門員(兼)中央調査チームリーダー	
加藤 竜	副主幹(兼)資料管理活用チームリーダー	
堀川 昌英	主任学芸主事	

※欠席者：2名

渡部 育子	委員	(国立大学法人秋田大学名誉教授)
大泉 真	所長	(兼 払田柵跡調査事務所所長)

4 協議内容

- (1) 令和7年度事業報告
 - ①令和7年度事業報告(調査関係)
 - ②令和7年度事業報告(活用・普及関係)
- (2) 第1回運営協議会における提言と対応について
- (3) 令和8年度事業計画
 - ①令和8年度事業計画案(調査関係)
 - ②令和8年度事業計画案(活用・普及関係)
 - ③令和8年度事業等についての提言

5 委員からの御意見・御提言(抜粋)

- ・参加者数推移を見ると若干講演会や座学は減っている。セカンドスクール等の事業の方は好調なので、もう少し参加いただけるように、がんばっていただきたい。
- ・冬場の金曜講座の回数を減らす計画は良い。今年度は史跡払田柵跡と雄勝城の回で参加者が多い。調査の報告ができる時期に講座の日程を調整すると良い。
- ・猛暑、クマの出没等、大変なことが多い調査活動だが、安全に気をつけて進めていただきたい。
- ・縄文時代は狩猟や採集を行っていたと一般的にとらえられているが、ある遺跡では、調査概要に狩猟道具がほとんど出土せず、採集中心の生活をしていたのではないかと書かれている。子どもたちにとってみれば、自分の学校のそばにある遺跡で教科書通りの知識と違う発見があり、興味がわくと思う。調査報告がまとまった遺跡の近隣学校へ、センター側から「出前授業に行きませう」と売り込む形で広げていくのも手ではないか。
- ・本校では子どもたちに歴史を大好きになって地域のことをもっとよく知ってもらいたいと考えている。埋蔵文化財センターのホームページを見て、展示室見学などのセカンドスクールや解説を聞いたり体験したりできる出前授業など、小学生が歴史を学ぶための取り組みが様々あることが分かった。学校では前年踏襲のカリキュラムを組みがちで、授業のねらいに合わせてセカンドスクールや出前授業をお願いするような形になる。センターのメニューを知らない場合もあるので、学校へのPRを広げていただきたい。
- ・カリキュラムが変わり6年生の社会は最初に公民分野を勉強している。以前は4月から歴史を勉強し縄文時代から始まっていたが、後ろの時期に歴史の授業がずれ込んでいる。各学校が動き出し、体制が整ってから歴史を学ぶことができるので、学校としては良いと思う。
- ・コロナ後の修学旅行では、大曲仙北地区や横手地区の学校のほとんどが仙台等に行く。コースの中で、歴史を学ぶような博物館を見学する学校もあるが、もったいないように思う。仙台に行って仙台の歴史を学ぶのではなく、地元にあるよいものを学んでほしい。
- ・学校には年間計画があり、計画の中で6年生の活動が伝統的に継続されている。PRの方法として、年度当初の校長会で直接説明するのが効果的である。まず校長先生を動かしてみる。委員の校長先生からセンターの取り組みを紹介してもらうことも一つの方法である。資料を見ると、ある小学校は3年生ではフィールドワーク的な活動、6年生では社会の学習として利用している。こうした取り組みは、大曲仙北地区の活用例として広げられることもできると感じた。距離的に遠い横手、湯沢地区では出前授業ができるということをPRして人数を増やしていただきたい。このすばらしい施設をいかに活用するか、小学生に興味を持たせ、興味・関心を持ったり専門的なことを学びたいという人たちは将来大人になっても講座に来ると思う。そのように裾野を広げてほしい。
- ・払田柵の歩き方等、夏の企画は夏休みをねらって行っていると思うが、暑さが厳しいため、時期を10月中旬の秋休みにずらすことも一つの方法である。中学校の利用が少ないが、社会科担当教員や校長会に対し、授業に組み入れることができるような材料や活用例を示せば需要はある。現在の授業では、黒板だけでなく、映像などの資料をたくさん使用しているが、本物にはなかなか触れる機会がないため中学校も開拓してほしい。
- ・新聞での生涯学習課文化財保護室吉川氏の連載記事は、子どもでも分かりやすく、発掘の楽しさや不思議、魅力などを発信しており、子どもたちにとっても非常にインパクトがあることだと思う。専門的な内容だと子どもの理解が追いつかない場合もあるので、連載記事のようにかみ砕いた内容であると取り組みやすいと思う。
- ・小学校でもキャリア教育が重視されており、発掘という仕事や考古学という専門的な学問を職業にしている人たちの働き方や働きがい、モチベーション、仕事に就いたきっかけなどについて、出前授業の中などで子どもたちに話していただくと子どもたちが職業を知る機会になる。

- ・以前、大曲仙北社会科教育研究会にセンター職員が体験キット等を持参し、先生方に紹介するという企画があった。若い先生が非常に増えており、そのような内容を知らない先生もたくさんいるので、周知するチャンスが来ている。
- ・校長会を利用する案、是非利用してセンターから働きかけてほしい。参加者数の推移で、全体で1,000人くらい減ってきている。様々な事業は発展的に解消して、新しい事業を作り出すことなどを考えていくのも良い。9年度に向けて大変難しいことかもしれないが、検討してほしい。

6 センターより（抜粋）：

- ・たくさん御意見をいただき、感謝申し上げます。参考にして取り組んでいく。センターの取り組みについて校長会で御紹介いただければと思う。来年度は発掘調査数が減少しており心配している。活用においては、じわじわ人口減少や予算の削減による影響が現実的に見えてきている。埋蔵文化財センターでは昔のものを扱っているが、未来を担う子どもたちに何を伝えていくことができるのかというところを、これからも皆様の応援をいただきながら探求してまいりたいと思う。